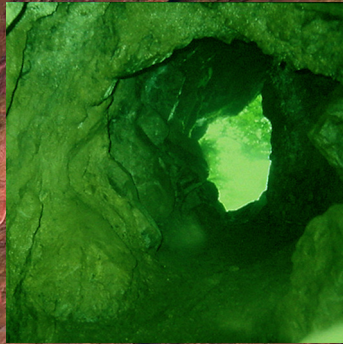


Mt. Myougi

リカバリー

recovery

下 奪還



八重野
充弘

(電子版)

鋼介と田丸老人との出会いは、絶妙のタイミングだったといえる。老人はまだ元気だったが、すでに喜寿を過ぎていて、妻と店を継いだ長男が、調査を続けることを快く思っていなかった。というより、老人がひとりで遠くまで出かけていくことが心配だったのだ。いつも詳しい行き先は教えていなかったようだが、靴や服を泥で派手に汚したり、手や腕にかすり傷を負ったりして帰ってくれば、目的はわかっているだけにだいたい想像がつく。埋藏金の存在については半信半疑だが、応援する気持ちもあるので、やめてくれとも言えない。二人はここ数年は悩み続けていた。そこへ鋼介が現れたものだから、家族はこれ幸いと、老人の手足になって欲しい、できれば代わりに調査をやってもらえないものかと懇願したのである。

老人も家族がそこまで心配していたことに、初めて気がついたようで、落胆のようすは隠せなかったが、むくれたりはねつけたりすることはなかった。むしろ遠慮がちにはあるものの、家族の側に立って鋼介に協力を求めた。二つ返事というわけではないが、鋼介は承知した。頼まれたからではなく、田丸家に着く前から半分以上は腹を決めていた。

「田丸老人は、自分が調べたことのうち九割以上はムダだったと言っていた。ぼくはそうは思わないけどね。実際にやってみればわかるんだけど、埋藏金探しというのは消去法でやっていくしか方法がないんだ。資料にしても場所にしても、可能性をひとつひとつ消していく。その積み

重ねの中からわずかな真実を抽出していくんだ」

鋼介は後半の話を切り出した。すかさずテン子コメントする。

「ノーベル賞をもらうような科学者だって、気の遠くなるような試行錯誤をくりかえしてるじゃない。調べるとか、研究するっていうのは、そういうことなのよね」

「粘り強く、めげずに続けることでしか、成功は得られないんだな」

ダイチも同意する。鋼介の頬がゆるんだ。自分の話が生徒たちにつけて悪影響は与えていないようだ。

「で、コースケ先生もそうやって粘り強く調査をして、真実にたどり着いたんだよね」

ヒデが、先を促すように鋼介の顔を見つめる。

「真実かどうか、結局自分にもわからないまま五十年近くがたってしまった。それが、どういうわけだか、いまごろになって突然、すべての謎が解けそうな局面を迎えているというわけなんだ」

「それにしても」

ヒデが鋼介の顔をじっと見つめてつぶやいた。なにを言い出すのかと、ほかの二人もヒデと鋼介の顔を交互に見ながら次の言葉を待った。

「いや、最初に埋蔵金と聞いたとき、コースケ先生と結びつかなくて。なんというか、あまりにギャップがありすぎて」

「あ、それはオレも感じたよ」

「アタシも」

ダイチとテン子の見解も一致した。

「ふつう、宝探しっていうと、金目当てのイメージじゃん。一攫千金とか言ってる。ところが、コースケ先生の話からは、ほとんど金の匂いがしてこないんだよな」

「確かに。億とか兆とかの単位の金の話じゃないんだよな。世界観がまったくちがうというか」
「アタシ、昔の人との知恵比べって聞いてゾクツときたんだけど、これって知的ゲームなのよ。そう考えると、コースケ先生にぴったりだと思わない？」

ヒデとダイチがうなずき、鋼介の口元が自然にほころんだ。

「田丸老人から受け継いだからそうなっただけだよ。相手が金の亡者だったらどうなったか」

「イヤイヤ、そのケースだったら、コースケ先生、ハマっていない、絶対に」

鋼介は思わず吹き出しそうになったが、すっと真顔になり、

「それにしても」

と、ヒデの口まねをした。

「キミたちはすごいな。人の話をよく聞いて、理解して、咀嚼そしゃくして、吸収してくれる。話すほうもホントにラクだよ」

「コースケ先生が話がうまいからだよ」

そんなやりとりのあとは、あまり時間がないこともあり、細かい説明は省略して、できるだけ

簡潔に筋が通るように話を進めていった。

田丸老人から借りた大学ノート五冊分の調査記録を東京に持ち帰ると、鋼介は夏休み中に寝る間を借しんでそれに目を通した。疑問点があると国会図書館に通って調べたが、知りたいことがわかる資料のほうが少ない。とくに「八門遁甲」に関しては、わずかに明治十七年発行の『八門遁甲要録』という全四巻の書物があるだけで、それも兵法書ではなく、寺社で年初に発行される十二支や九星などに基づく運勢表のようなもので、ほとんど参考にはならなかった。その書物にも、兵法としての「八門遁甲」に関する史料はまったく残っていないと書かれている。

デスクワークにある程度のケリをつけると、鋼介はバイクを駆^かって群馬方面へ出かけた。フィールドワークの重要さは民俗学と共通する。まずは、田丸老人がたどった道をなぞることにした。得られるものは少ないかもしれないが、そのプロセスを経なければ、老人を超えることはできないし、光は見えてこない。彼が見落としたこともあるかもしれない。

そこで、上毛^{じょうもう}三山、すなわち、赤城、榛名、妙義の山中を徹底的に調べ歩いた。この三山はもともと神聖な場所です。山岳信仰の対象とされ、それぞれに格式の高い大きな神社がある。神仏習合の時代に高僧天海がそれを無視したとは思えず、徳川氏が江戸に幕府を開いた当初から重要視していたことは容易に想像できる。おそらく天海は、三山を基点にした大規模な結界を張ったことだろう。幕末、徳川幕府の危機に際し、主戦論者たちがこれを意識しなかったはずはない。この時代まで、兵法と占法はほぼ同一のものだったのだ。

鋼介は、大きな神社から路傍の石造物にいたるまでの人工物をはじめ、山嶺、大木、巨石など「不動のもの」を追い求め、御用金埋蔵との関連を探った。そして、田丸老人と同じように取捨選択を行い、たどり着いた結論は、やはり当初の計画通りには進められていないということだった。かといって、まったくゼロでもなさそうだ。計画からかなりスケールダウンしているものの、官軍との最後の決戦に備えて、上州まで運び、一時的に埋蔵隠匿されたものが、うわさどおりいくらかはあった。そう考えるのが自然だ。

その根拠となったのは、旧三国街道や旧沼田街道沿いの村々に残された幕末の目撃談である。祖父母から聞いた話を記憶している古老もいたし、村史に具体的に記録されているものもあった。川舟から大量の荷物が陸揚げされるのを見たとか、武士団が荷物を馬や牛の背に積んで街道を進んでいったとか、夜な夜な、川から通じる山間の道でたいまつのみかりを見たなどという伝承で、すべてが幕末の慶応四年三月に集中していた。江戸城明け渡しのおよそひと月前で、新暦でいえば一八六八年四月。もちろん、一時的に隠された御用金がすべてそのまま残っているはずはない。多くは回収され、目的のために使われたことだろう。

そこまでの調査にかけた年数は約二年。田丸老人が十年かけて調べてきたことを、きっちりトレースした。そして、そこを第二の出発点とすると、鋼介独自の分析を始めた。幕末維新時に起こった新政府軍と旧勢力との小競り合いについて、その期間、規模などを細かくみていくと、用意した軍用金が使われたか否かがある程度推定できる。そして、使われなかったとみた場合には、

事後に回収されたかどうかを考えてみた。時間的余裕がなかった、埋蔵地に近づくことができなくなった、秘密を知るものがいなくなったなどの理由で、回収の機会が失われてしまったことがあるだろう。ある期間、その考証に時間を費やした末に、鋼介はいまだに地下に眠り続けているものが複数あってもおかしくないという結論に達した。

その中で最も鋼介の心をとらえたのは、旧沼田街道の片品村に残る伝承だった。村の中心部を、千両箱らしい木箱を二個ずつ振り分けに背負わされた八頭の牛が、「おじうた」の方へ引かれていったというものだ。夜陰に紛れてというのではなく、白昼堂々と、木箱を拵などで覆いもせず、多くの村人が見守る中を通り過ぎていく。鋼介はこの話を伝え聞いている古老二人に会ったし、村史にも慶応四年三月の出来事としての記録が残る。

片品で起こった小競り合いといえ、年号が明治に変わって間もない同年五月の戸倉とくら戦争があげられる。このときは、尾瀬の入り口に近い片品の北の村はずれに本営を置いた新政府軍に対し、旧幕臣の大鳥圭介おおとりけいすけ率いる約三百人の会津勢が、隣りあう戸倉村を舞台に銃撃戦を行い、新政府軍は二名の死者を出して退却した。その後、戸倉村は会津軍の焼き討ちにあったが、戦いはそれだけで終わっている。

この一例でもわかるように、東征軍とも称された新政府軍の関東侵攻は実にスピーディーで、上州の各藩が新政府軍に対し早々と恭順の姿勢を示したこともあって、江戸城開城のころ、四月には、ほぼ全域を支配していた。だから、それ以前に旧勢力によって埋蔵された御用金は、その

場所に近づくことさえできず、回収の機会が失われたと考えていいだろう。

鋼介は、これ見よがしに運搬したのには理由があると考えた。また、「おじうた」は地名であるとの確信し、地図を隅々まで調べた結果、鎌田から花咲へ抜ける山道の途中に「宇条田峠」を発見、「うじょうた」がなまって「おじうた」として伝えられたのではないかと考えた。胸躍らせて行ってみると、はたして、そこには期待していたものが存在した。

いよいよクライマックスというとき、話をさえぎるように、ピュー、ピュー、ピューというアオゲラの鳴き声が聞こえてきた。予定の九時だ。三人の生徒はまだ聞き足りなさそうだったが、経緯はひととおり話したつもりだったので、ここが切り上げどきと判断して、鋼介は生徒たちを帰宅させることにした。

「あとはまだ数日後に。ぼく自身がまだ知らないことがあるので、それを突き止めないことには先に進めないんだ」

そう言うのと、三人は納得顔になった。突き止めたことといえは決まっている。宇条田峠でほんとうはなにか重大なものが見つかったのではないか、その疑念はますますふくらんでいた。生徒たちが帰り支度をととのえ、席を立とうとしたとき、テン子がふと思いついたようにつぶやいた。

「日本人って、昔から三という数字にこだわるのよね」

彼女は上毛三山の話題が出てきたとき、そう思ったというのだ。そして、三名城とか三霊山、三名園、三大祭り、日本三景などをあげ、昔もいまも「三大〇〇」を選びたがると発言した。するとダイチが口を挟んだ。

「日本に限らないんじゃない？ 外国でもよく、強いものや立派なものを上から三つ選んで、ベストスリーとかビッグスリーとかいうじゃん」

思いがけない方向に話が盛り上がってきたので、鋼介は御用金埋蔵の方法と手段の裏側にあつたと思われる兵法「八門遁甲」について、田丸老人から聞いたことを口にした。そしてその根底にある古代中国の思想「三才さんさい」にも言及した。三才とは、この世は天・地・人の三要素から成り立っており、何事も「天の刻とき」「地の利」「人の和」が揃ってはじめてうまくいくという考え方で、賢者は大事を行うとき、スタート地点で必ずこれを念頭に置いたという。

「じゃあ、それが世界に広まったんじゃない？」

と、ヒデも話に割り込んできた。彼は、三才の思想は現在もなお社会のあらゆる場面で息づいていると主張し、政治の世界で権力の乱用を防ぐための「三権分立」、争いごとを収めるための「三すくみ」の考え方を例にあげた。そして、大事なものの、優れたものは、多ければよいというものではなく、絞るすぎてもいけない。ちょうどいい数が「三」という数字で、これは人間の本能から生まれたものではないだろうか。物事が複雑になりすぎると、わかりにくく、收拾がつかなくなる。三つの柱、三つの要素に集約すれば、スッキリして理解しやすくなるという結論に至った。

その最後に鋼介が言った。

「たまたまかもしれないが、物を隠し、それを第三者に託す場合に示す手がかりは、基点、方角、距離の三要素なんだ」

へえという声が上がったところで、鋼介は帰宅を促そうとしたのだが、突然あることに気がつき、あまりのことに息が止まった。

「どうしたの？」

テン子が驚いて聞く。

「あ、いや、ちょっと思い出したことがあってね。またいつか話すよ」

そう、いまはまだいいだろう。だが、こちらが話す前に、三人のうちのだれかが気がつくにちがいない。勘のいい子たちばかりだから。それほどすごいことを、鋼介は三人の名前に発見したのだ。梅宮天子、松井秀人、竹元大地。天・地・人の「三才」が入っている。おまけに「松竹梅」までもが。厳寒に耐えるこの「三友」は中国から伝わり、日本でもおめでたいものとして定着した。(やはりこの三人はただ者ではないようだ)

偶然にしては、あまりにもできすぎている。その思いに身震いした。鋼介はふうっと大きな息を吐いて心を落ち着けると、短く言った。

「さあ、帰ろう」

三日後、仕事に区切りがつき、ほかのスタッフが帰宅したあとで、鋼介はスクールの電話から額田史朗の携帯にコールした。スクールから与えられた携帯はあるが、額田に番号を知られたくない。相手はすぐに出た。表示されたナンバーですぐに鋼介からだどわかったようだった。

「桜場さんですね。お待ちしていましたよ」

弾んだ声が聞こえてきた。

「話したい。早いほうがいいかな。お互いに」

「ありがとうございます。願ってもないことです。では、明日にでも。場所はどうぞしましょう。こちらから伺ってもよろしいですが」

「深沢でお願いしたい」

「は？」

一瞬、相手の声がこわばった。

「いやあ、さすがといえますか、いろいろお調べになっているんですね」

「生まれつき、嗅覚はいいほうなので」

「はあ」

冗談めかしていつてみたが、額田は緊張のほうが先に立っていたようだ。

「少しお待ちいただけますか。予想もしなかったことです。申し訳ありません」

額田はすぐに電話をかけ直すと告げた。深沢と相談するつもりだろう。

伴禮治郎ばんれいじろうについては、人名辞典やネット上の情報でわりあいすぐに調べがたった。ヒデとダイチから知らされたのは姓だけだったが、見当をつけてたどっていくと、それ以外には考えられない人物に行き着いた。

一九二〇年生まれというから、生きているとすれば九十九歳。いや、仮定は前提として考えなければならぬ。これまでの経緯をみれば、彼は生きていて指示を出している。頭脳はまだ明晰だということだ。第二次大戦中、伴は中国大陸で帝国陸軍の軍属として、現地で物資調達の任に就いた。貴金属やレアメタルの鉱山を押さえたほか、中国人の金持ちから金銀や宝石を強制的に供出させるなど、かなり手荒いことをやっていたようだ。終戦直後、彼の手元には莫大な資産があり、それが日本の保守政党の設立資金になった。

終戦時はまだ二十五歳の若者。鋼介が群馬県警の本部長室で顔を合わせたときは五十二歳だったことになる。初老に見えたが、いま考えればそうでもなかったわけだ。終戦から三十年近く、彼は日本の政財界を裏で操ってきたのだろう。そして、資金が必要になればあの手この手のかき集め、回していたと思われる。そういった「フィクサー」と呼ばれる人物が、何人かいたというのは聞いたことがあった。伴もその一人で、資料によると、右翼団体や裏社会の連中を支配下に置き、彼のひとりで動く人間は十万人を下らなかつたという。令和と年号が変わった今日、まさか往時の勢力をもちつづけているとは思えないが、裏社会のことはわからない。四十七年前、三十分ほどしか顔を見ていないから容貌のディテールまでは覚えていない。百歳に手が届くいま、

昭和の怪物はどんな姿でこの世に存在し続けているのだろうか。考えただけでもおぞましい。

およそ十五分後、電話が鳴った。

「桜場ですが」

鋼介の声は落ち着いていた。

「深沢でお話を伺うことになりました。明日の午後五時にクルマでそちらにお迎えに上がります。よろしいでしょうか」

相手の声も鋼介以上に落ち着いていた。

「けっこう。お待ちする」

電話の回線の中で、赤い火花が散っていた。

翌日、約束の時刻ぴったり、額田が運転するグレーのセダンがスクールの門前で停車した。すでに支度していた鋼介は、同時に玄関を飛び出した。

車中、ほとんど会話はなかった。額田もいくらか緊張しているように見える。ヒデとダイチがバイクで追いかけたのと同じルート、世田谷通り、環状八号、駒沢通りを通って世田谷区深沢の閑静な住宅地に着いた。半地下になったガレージのシャッターが自動的に開き、セダンは滑るように入庫した。停車したところで、額田が口を開いた。

「ご承知と思いますが、桜場さんがお会いになりたい方はかなりの高齢です。耳も遠くなってい

ますし、あまり長い時間はお相手できないかと思えます。どうかご配慮のほど、お願いします」
「承知した。お年寄りをいじめるようなことはしないよ」

自分でドアを開けて車外に出た。エアコンのきいた車内と比べると、かなりの温度差があり、むっとする湿気に混じって土の匂いがした。

鋼介は額田のあとについて、ガレージから続く屋根のついた通路を通り、一段上がって黒い石造りのポーチがある玄関にたどり着いた。オークの枠に分厚いガラスが五枚ずつ二列にはめ込まれたドアを開けると、外と同じ石が敷き詰められた畳二畳ほどのホールがあった。靴を脱いで黒光りするフロアリングの廊下へ導かれ、応接室と思われる部屋に通された。二十畳ほどの広さがあり、中央に青みがかった大理石のテーブル、周りに三人掛けの革張りのソファが一脚と、一人掛けが二脚置かれ、それぞれにムートンが敷かれていた。立派なものにはちがいないが、鋼介の趣味ではない。冬場ならまだしも、梅雨明け直後のいま、ムートンは見ただけで暑苦しい。

「お掛けになって、しばらくお待ちください」

額田は三人掛けのソファの方を手で示し、ドアを開けて退出した。鋼介はそこに身を沈め、一人になった部屋をゆっくりと見回した。鴨居の上に横長の大きな額がある。上手いのか下手なのかわからない漢字が五文字。署名はどうやら昭和の一時期首相を務めた人物のものようだ。これも趣味ではない。ほかに、中国から持ち帰ったのだろう、翡翠の細工物や陶磁器類がいくつ安置かれていた。

綱介はいま、悪臭を放つガスがぶくぶくと泡となつてはじけるドブのような、権力の裏側にうごめくどす黒い場所に、身を置いていることを実感した。この古ぼけた屋敷、そこに巣くう人間の存在がおぞましい。これまで吸ったことのない異様な匂いのする空気を肺に入れながら、腕に浮き出てきたぶつぶつをさすった。できれば、いまずぐにここから逃げ出したいくらいだ。五十歳前後と思われる額田という男は、表面的には紳士面をしているが、いつ牙をむいてくるかわからない。

考えてみれば、政治というのは昔もいまも利権の取り合いである。個人や組織のエゴがぶつかり、せめぎ合う。そんな世界だから、黒いものの存在が許容されているのだ。これを必要悪というのだろうか。いやいや、必要であるはずはない。政治家と称する者の中に、ほんとうに国のため人のために働く覚悟をもっているのは、ほんのひと握りに過ぎないだろう。日本だけではない。多くの国の元首が、支持者のための言動に終始し、まともな仕事はしていない。最近とくにその傾向が強いように思う。

あれこれ考えているうちに十五分以上が過ぎていただろうか、ドアが開いてまず額田が現れた。続いて、車椅子に乗せられた、腹話術の人形を連想させるしわくちやの老人が近づいてきた。ジャージー姿の屈強そうな若者がそれを押していて、額田の指示で綱介の左脇の空いたスペースに車椅子をつけた。

「御前、こちらが桜場綱介さんです」

額田は老人の耳元でそう言うと、向かいのソファに座った。若者は車椅子の後ろで直立不動の姿勢をとった。

(御前とは――)

おそらく初めて耳にする言葉だ。周りがそう呼んでいるのか、それとも本人が呼ばせているのか。鼻の奥にわいてきたかび臭さに、鋼介はむせかえりそうになった。二十一世紀に入ってそろそろ二十年になろうというのに、まだこのような妖怪が存在しているなんて、本人を前にしてもなお信じがたいことだった。しかし、七十年以上、彼が日本の政財界を裏で操ってきたことはまちがいない。知りたいのは、いま現在、いったいどれほどの力をもちあわせているのかということだ、それは話をしながら探っていくしかない。

「ほう、あんたが桜場さんかい？」

しゃがれた声が鋼介の左側から聞こえた。

「はい、私が、桜場、鋼介です。お久しぶりです」

鋼介は大きめの声で、言葉を句切りながら言った。

「お久しぶり、か。ようは覚えていないが、五十年ぐらいたつのかな？」

「はい、私の記憶では四十七年ぶりかと」

「顔もよう覚えたらんが、歳をとったんだなあ、お互いに」

「はい、道で会ってもわからないでしょう」

「ファツ、ファツ、ファツ、面白いことを言う。ワシはもう道を歩かんのだよ」

老人は相好を崩した。半開きの口の中は総入れ歯だが、確かに頭はまだしっかりしているようだ。

「ところで、この額田を通して、あんたに頼みごとをしているわけだが、引き受けてもらえるだろうか」

九十九歳とは思えない口調で、単刀直入に切り込んできた。

「お引き受けするかどうかは、私の質問にお答えいただいたあとで考えます」

鋼介は、額田の威圧的な視線を感じながらも、きつぱりと言った。老人は少し思案顔になり、しばらく沈黙した。

「聞きたいのは、群馬のあそこで見つかったものことだな。そういえば、あんたは知らないままだったんだものな」

鋼介は相手の顔をじつと見つめた。斜めからだから見ることできたのかもしれない。正面からならどうだろう。小柄でしわくちなな容貌の中に凄^{せいき}気が感じられた。

「そりゃあ知りたいわな、自分が見つけたもののことを。よろしい、詳しく聞かせてあげよう」

鋼介の視界の中で、正面にいる額田の顔が、少しやわらいだ感じがした。

伴禮治郎は、ときどき吸い飲みのお茶でのどを潤しながら、三十分ぐらいたったろうか、次のような打ち明け話をした。

伴はもともと徳川幕府の埋蔵金に興味をもっていて、戦前の軍による大規模な発掘のことも知っていたし、明治の半ばから赤城山の西麓に住み着き、二代にわたって発掘を行った一家や、別の場所を掘っていた元警察署長とも交流があった。資金を使い果たし、食うや食わずだった元署長には、金銭的な援助をすることもあった。しかし、両者ともなんの成果もなく、四十七年前には発掘がほぼ終息していた。そこで、新たな情報を求めて群馬通いをしていたのだが、かつて面倒をみたことのある県警本部長を訪ねた日の夜、偶然にも片品村で穴を掘っていて捕まった若者のことを耳にした。警察は軽井沢の保養所立てこもりや集団リンチ事件を起こした極左グループの一味とみていたが、伴はすぐに別の可能性を感じた。片品村が、それまでにわかっていたグループの行動範囲から少しずれていたこともある。伴は本部長に現場を見せてほしいと求め、若者が捕まった翌日の朝にはそこに足を運んだ。

宇条田峠の道路下にあけられていた穴を見て、伴は即座に、これを掘り出した若者が極左グループとは無関係であると見破った。遺体を埋めるような穴ではないからだ。巧みに木枠が組まれたそれは、大事なものを隠すための宝蔵の造りだった。そしてそこから、十六個の千両箱が見つかった。しかし、すべて中身は石ころ。ところが、伴の頭にあることがひらめいた。

中国大陸で物資調達の活動をしていたときのこと、そこその財産を持つ家の地下には、必ずといっていいほど、ひと抱えはある大きな瓶が埋められていて、現金などを入れて、すぐにはわからないように巧妙にふたがしてあった。だが、ある家で、そういった金庫代わりの瓶を見つけ

たあと、もっと多くの財産があるはずとらんで部屋中を掘り返したところ、瓶のすぐ下に、石造りの室が見つかり、貴金属や宝石が収められていたのである。つまり、金庫は二重構造で、瓶の中に収められていたのは日常用の現金とちよつとした貴重品のみ。もっと大事なものはその下に隠されていたのだ。

伴はなるほどと思った。盗人は瓶を発見したところで、してやったりと中のものを取り出し、普通は満足する。すると、そこは安全な場所に転じてしまうのだ。疑いを抱いてさらに掘る自分のような者はめつたにいまい。そのことを思い出して、彼は（もしや）と思った。幕府の御用金は兵法「八門遁甲」によって隠されていると聞く。その秘術は中国から伝わったもの。古代からの中国人の知恵がそこに集約されているのだとしたら。

千両箱のすべてを地上に上げたあと、伴は自ら穴の底に下り、ツルハシの先で土を掻き出してみた。すぐに砂礫の層が現れ、一〇センチほど剥がしたところで異物に突き当たった。細い丸太が敷き詰められている。

（この下になにかがある！）

伴は確信した。そして、穴から上がると、本部長に言った。

「この調べは私にまかせてもらおう。結果は報告するが、だれも近づけないように。駐在にも途中の道の監視だけをするよう伝えてくれ。それと、ここを掘った若者だが、極左グループとの関連はなにも出てこないだろう。だが、釈放すればそいつはここへ戻ってきて、めんどろなことになる

るから、決着がつくまで、なんとか県警のほうで引き留めておいてくれんか」

伴はいったん東京に戻ると、すばやく工事用の道具と資材、作業員の手配をして、二日後には舞い戻ってきた。そして、二重構造になった宝蔵の底から、きつちり一万六千枚の小判を見つけただのだ。それを千枚ずつ元の木箱に詰め、東京の自邸に運ばせると、本人は県警本部へ行って、景山本部長に報告した。

正面に座る額田の視線をずっと感じていたので、平静を保っているつもりだったが、鋼介はいつのまにか歯を食いしばり、汗ばんだ両手を強く握りしめていた。額には脂汗をかいていたかもしれない。話のつじつまが合っているだけに、悔しさと、怒りと、そしてたとえようもない哀しみがこみ上げてきた。それを察してか、伴老人は言った。

「横取りしたような形になったが、悪く思わんでくれ。お宝はちゃんと金になり、世の中のために使われたんだから」

この男が「世の中のため」といえば、どういうことかおおよそ想像がつく。世の中のほんの一部の権力をもつ者の役に立ったただけだろう。

「聞くが、あんたはあれをどうするつもりだったんだい」

今度は相手が質問してきた。

「あまり考えていませんでした」

鋼介は正直に答えた。目的は探し当てること、真実を知ることだけだった。

「ほう、金目当てではなかったと？」

「実際、見つけても、右から左に金になるわけではないですから」

一万六千両の小判の値打ちを計算してみたことはあった。幕末近くに発行されたもので、鑄造量の多かったものと仮定すると、文政か天保の小判の可能性が高い。もちろん二分金や一分金などが混じっていることも考えられるが、金品位は同質なので、小判だけとみて計算しても、大きな誤差はないだろう。当時、文政、天保の小判は一枚二十万円から三十万円で取り引きされていた。一万六千枚は、三十二億から四十八億。ただし、市場価格というものは、同じものが大量に出回ると一気に下落する。だから、こういう計算はほとんど意味がない。第一、小判を万単位で買い取る業者なんてどこにもいない。

そのことを思い出して、鋼介は逆に聞いた。

「いったいどうやって、それを処分したのですか？」

「もちろん、日本の古銭の市場には一枚も出さなかつたさ。時間をかけて買い手を探し、まとめて売りつけた。半分以上は外国でさばいた。いるんだよ、こういうものを欲しがるのが。たとえば。海外への移民で成功し財をなした連中は、日本人としての誇りを守るために金に糸目はつけない。格好の品なんだな、二億ぐらいすぐに出す。国内でも、自分の土地に城を建てるやつがいるだろう。ああいうのも喜んで金を出す」

コロンビアでの成功者、辻壺之助氏が大事に持っていたのは、やはりそのうちの一つだったのだろうか。

「二億円、一箱にですか？」

「ああ、相場に合った金額だな。全部さばくのに十年近くかかったが、しめて三十億を超えた」
「その金をなんのために使ったのですか？」

「いろいろだが、ひと言で言えば政治の安定のため、ひいては世の中の安定のためだ」
「一部の人からみての安定ですね」

「ん？ そう思うか」

「はい、そのかげでしいたげられた人が大勢いたことでしよう。命を落とした人さえも」

保守政権を守るため、不祥事のみ消し、マスコミの裏工作、邪魔者の排除、そして選挙の際の票のとりまとめに、その金が使われたことは容易に想像できる。財源がけっして表に出ないように。裏で数億の金が動けば、表にはその何十倍、何百倍もの効果が生まれる。そして、現政権を守るために、いままた多額の金が必要になってきているということだろう。鴨居の上の額に揮毫した人物の名が浮かんだ。

「ま、そういう議論はやめて、そろそろ本題に入ろうじゃないか」

伴はうるさそうに片手を顔の上で振った。額田も鋼介の顔を見て二度三度うなずいている。
「その前に、もう一つ聞きたいことがあります」

鋼介は負けじと声のトーンを上げた。

「今回の私への協力依頼のことですが、ほかに情報源となった人物がいるはずですよ」

「そのことかね。あんたはわかっているはずだな、それがだれかは。今さらそれ以上のことは知らなくてもよからう」

「私ではなくて、その人物に直接協力を求めたらどうなんです？」

「それができないことは、あんたにもわかるだろう」

ちよつと鎌をかけてみたら、そんな答えが返ってきた。一時期、ヤツが密かに帰国し国内に潜伏しているといううわさが立ったが、やはり事実ではなかったのだ。日本の公安は甘くない。あの著名な女闘士も、逃げおおせることができなかったくらいだから。そしてヤツはいまだに国際指名手配中のテロリストだ。四十七年前の南軽井沢の保養所立てこもり事件の犯人のうち、彼だけは裁判が終わっていない。もう一人の主犯格の男には、まだ執行はされていないが死刑判決が出てかなりの時がたつ。同格のあの男も死刑は確定だ。罪を償おうとはせず、命を妙義の洞窟内のもので購^{あがな}うつもりなのか。甲州金がそれだけの価値があるならんでのことだろう。そして、この伴老人には、あの極左思想のテロリストの願いをかなえてやる意思があり、またそれができるといふのだろうか。

「しかし、あなたのような方と、あの男との間に接点があるとは思えないが」

鋼介は独り言のように言った

「それなりに歳をとったし、やはり故国の土を踏みたいという気持ちわいてきたのだろうな」
「ということは、あの情報を提供する代わりに、身分の保障を求めてきたというわけですね」
「ま、そういうことだな。こともあろうに内調にコンタクトしてきた」

「内閣情報調査室ですか」

「ああ、いまは内閣官房内の一組織だ。言っておくが、あんたが特別な人間だと思っているからこんなことを話すのだが、普通はこないだできた秘密法とかいう法律に触れることだからな」
「そりゃそうでしょうね」

鋼介の口から笑いが漏れた。

「内調の連中も最初は相手にしなかったが、中にワシのことを知っている者がいて、あの人はそういうことに詳しいからと、相談してきたというわけだ。もちろんワシも疑ってかかったが、気になることがあって、この額田に電話をかけさせたんだよ」

「電話を？」

「はい。向こうも用心深く、何人かを經由して、最後に中東のある国のホテルを指定してきました」
額田が話を継いだ。

「本人確認をしたうえで話を聞くと、つじつまが合いました。そして、過去に群馬県内で大量の金貨が見つかった事例がないかと尋ねてきました。ないはずですがと答えると、ではまだ望みがある。さらに、自分だけでなく、日本国内にもう一人場所を知っている人間がいるというんです」

「それが私とはなぜ？」

額田は視線を伴老人に移した。

「イニシャルを覚えていたよ。ケイ・エスト。それを聞いたワシはピンときたんだ。あんたの名前を覚えていたからな」

「で、場所についてはどのように？」

鋼介は再び額田の目を見据えた。

「妙義山東麓の、妙義神社より南寄りの場所で、県道のすぐ脇だと言っていました」

「そこまでわかっていたら、私の協力など必要ないんじゃないか」

「いやいや、そうもいきません。我々だけでも、ずいぶん探し回ったんですが、らちがあきませんでした」

巧妙につくられた洞窟の入り口が目には浮かんだ。もしあれからだれも入り口を開けていないとしたら、ますます探し当てるのが難しくなっていることだろう。鋼介でさえ、そこへたどり着き、カムフラージュを見破る自信があるわけではない。

「桜場さん、そろそろ限界かと。ほかのご質問がなければ、お返事を聞かせていただけないでしょうか」

額田が腰を浮かせた。伴老人の顔にもやや疲労の色がにじんでいる。鋼介は右腕の時計に目を落とした。この部屋に入ってから一時間半近くが経過している。

なんとか現在までの経緯を聞き出すことができた。これがほぼ真実だろう。では、これから相手とどう向き合うか、態度を決めなくてはならない。返答をせかされている。

「では、最後の質問にしましょう。あなたがたは見つけたものをどうするつもりですか？」

「まあ、前回をお手本にして進めたいと考えている」

伴老人は曖昧に返事をした。

「ということは、公表はしないと？」

「表沙汰にするつもりはない。世間に騒がれたくないからな」

鋼介は老人の横顔にチラリと視線を投げかけたあと、天井を見上げた。幅の広い檜の板が張られている。その木目の数を無意識に数えていた。

(ここでノーと答える選択肢はないのかもしれない)

思えば、帰国してから三十年の間に、ひとりである場所に行くことはできた。そうしなかったのは、気持ちがあつた動かなかつたからだ。二度と踏み込んでほならない世界だったし、あれを世に出すことの意味が感じられなかつた。いま、気持ちに変化が起こっているのは、四十七年前に踏みこじられた自分を取り戻すチャンスと思うからだろう。甲州金そのものに魅力を見えることができるかもしれない。片品村での成果を示す証拠はなにもないが、妙義山でこれからつかみとる成果、おそらく片品をしのぐ大発見の事実を見せつけければ、幻を現実として世間は認知するかも

しれない。

いっほうで、それに意味があるのかと自問してみる。いまさらどうでもいいではないかという自分と、ここで意地をみせないでどうするという自分とがせめぎあう。しかし、最終的にはよみがえってくるあの悔しさをおさえることはできなかった。全身全霊を打ち込んだ青春の一コマを、マイナスにしたまま終わりたくはない。大きな犠牲も払っている。いずれにしろ、ことはすでに動き出しているのだ。

もちろん相手の思惑どおりにさせる気はない。こちらのペースに巻き込む手がなにかあるはずだ。作戦は白紙の状態だが、腹づもりは決まった。鋼介はゆっくり視線を落とすと、握りしめた両手を見つめてきっぱりと言った。

「わかりました。長い間足を運んだこともないので、わかるかどうか保証はできないが、その場所へ案内してもいい」

「おお！」

伴老人と額田がほぼ同時に声を上げた。

関東甲信越地方の梅雨明けが宣言されたのは七月二十九日。前年よりひと月も遅かった。そしていきなりの酷暑。テレビの気象情報では、熱中症への注意を繰り返し呼びかけている。

深沢の伴邸を訪ねたのは七月三十日だったが、その翌日の午前中のこと、自席にいた鋼介のもとに、スクール代表の須藤陽香がやってきて耳打ちした。

「先ほど、文部科学省の大臣政務官から電話がありました。副代表に最近変わったことはありませんかという問い合わせでした」

(そうきたか)

鋼介は眉をひそめた。一つの牽制だろう。ある程度予測はしていた。いまのところアドバンテージはこちらが握っているが、相手はできるだけ均衡した関係をキープするために、あらゆる手を使ってくるはず。政治家だろうが官吏だろうが、意のままに動かせることをアピールしておきたいのだ。あいにく鋼介が動揺するほどの効果はなかったが、陽香やオーナーを心配させるわけにはいかない。

「だいじょうぶです。スクールに迷惑がかかるようなことは絶対にしませんから、ご安心ください」そのひと言に、陽香は納得した様子で微笑んだ。信頼してくれることが嬉しい。当然だが、余波が周囲に及ばないようにすることを肝に銘じていた。最重要課題は、絶対に生徒たちを巻き込

んではならないということだ。これまでは、行きがかり上、事実を伝えないわけにはいかなかった。彼らには隠し通せないと思ったからだ。だが、どこかではつきり線を引く必要がある。そのタイムミングを計るのは難しい。

その日の夕刻近く、鋼介は農園の北側に数本生えているヒマラヤスギの大木の下で、三人の生徒と向き合っていた。ここにはレンガを積み上げたバーベキュー用のグリルが二基あり、手作りのテーブルとベンチが並べられている。外気温はまだ三十度をかなり超えていたが、青々と育った農園の作物をかすめて届く微風が、肌に心地よかった。冷房の効いた室内よりも、このほうがずっと快適で体にいいし、ほかの生徒やスタッフに話を聞かれることもない。

鋼介は、前日の伴老人とのやりとりを、ほぼそのまま三人に伝えた。相手が狙っている第二のターゲットについても詳しく説明し、協力を約束したことも付け加えた。

「協力といっても、それは手段であって、目的は真実を世の中に知らせることだよね」
勘のいいテン子が、口火を切った。

「四十七年前にさかのぼって、すごい発見をしたことを世間に認めさせる。それが目的。そのために第二のターゲットを見つけて公表し、実績をアピールしなければならぬんだ」

「ところが、相手は絶対に公表されたくない。闇から闇に処分したい。そこが争点になるね」
ヒデとダイチがそう続ける。

「公表できたら、きつと大騒ぎになるよね、いまだかつて、そんなすごい埋蔵金が見つかったこ

とはないんでしょ」

ヒデは興奮をおさえられないでいる。三人の中でいちばん冷静に見えるのは、やはりテン子だ。「問題はどうかやって公表するかだよな。ほんとうはテレビ局なんか売り込んだらとびついてきそうなネタなんだけど、コースケ先生の話を聞いていると、そう簡単にはいかない感じだもんね」
「そう、プロデューサーやディレクターレベルではまちがいなく企画が通るだろうけど、トップまでいったところでストップがかかるってことか」

ヒデもテン子と一緒に考えて込む。すると、ダイチがぼそりつつぶやいた。

「動画をネットにアップするという手がある」

「おう！」

それまで黙って聞いていた鋼介が、驚いたように声を上げた。

「そう、ネットを使って現場からライブ中継するんだ。コースケ先生、わかるよね」

「あ、ああ、だいたいはね。実際にどうやるかは別にして」

鋼介は正直に答えた。

「それにはまず、場所を正確に知つとかなくちゃいけないんだけど」

「そうか。正確といえるかどうか、微妙なところなんだが」

鋼介はズボンの後ろポケットからスマホを取り出し、地図アプリを開いた。広域の画面で群馬県西部を表示し、妙義山東麓をズームアップすると、ダイチの顔に近づけ、一点を指で示した。

「だいたいこのあたりだ」

「金鶏山きんけいざんという山の南側だね」

ダイチは自分のスマホを取り出して、何やらいじくっていたが、やがて、にんまりとして言った。「だいじょうぶだ。LTEのサービエリア内だから、動画もオーケーだと思う」

LTEというのはLong Term Evolutionの略で、モバイル通信の規格の一つ。スマホやタブレットで大容量の動画などを高速で送信できる、いわゆる第四世代、現段階では最高レベルの通信システムだ。この世界は日進月歩。さらにスピードアップする「5G（ファイブジー）」という第五世代に移行する日も近い。鋼介はたまたま周りに詳しい人間がいるので、年齢の割にはなんとかついていくことができていた。

「でも、洞窟ちゅうくつの中から直ちよくというのはまず無理だから、いったん録画をして、外へ出てアップロードするという手順になるかな」

それから、ダイチは鋼介にもわかるように、動画をアップする方法を細かく説明してくれた。鋼介はうなずきながら聞いていたが、区切りがついたところで少し重い口調で言った。

「技術的に可能なことはよくわかった。でも、大きな問題がある。見た人が信じてくれるかどうか。フェイクニュースと思われたら意味がない。拡散もしてくれない」

「そりゃそうだ」

三人は首をひねった。

「それから、もう一つ、クリアしなければならぬことがある。現場で事前の準備がまったくできないことだ。実をいうと、昨夜からぼくは監視されているようだ。気のせいではない。自宅でもスクールでも、ぼくの動きはチェックされ、相手の本部に報告されているのはまちがいない」

「そうなの？」

ヒデが首をすくめて声を発し、目だけを動かして周囲に視線を這わせた。この場所は、スクール周辺の公道からは死角になっているので、覗かれる心配はなかったが、いずれにしろ簡単には事が運びそうにないのを、三人は改めて認識したようだった。しかし、あまり消沈させてしまってもかわいそうだと思い、鋼介は少しは展望の見える話も持ち出すことにした。

「ぶつつけ本番になるのはしょうがないけど、昨日の夜、パソコンでグーグルマップを開いたら、運がいいことに、県道沿いは全部ストリートビューで見ることができたんだ。だいぶ様子は変わっているが、ツーリング気分を味わいながら道をたどっていったら、それらしい場所を見つけることができた。さつきダイチに教えたのは、そうやって割り出した場所なんだ」

「すげえ」

「やるじゃない、コースケ先生！」

三人の歓声を聞いて、今年古希を迎える老教師は相好を崩した。

「それと、現場から連中を遠ざける必要がある。少なくとも数時間は。その秘策はちゃんと練ってある」

すると、

「いま思いついたことがあるんだけど」

ダイチがまたぼそりとつぶやいた。

「個人で開設しているインターネットテレビの中に『ピックアップテレビ』というのがあって、ネット上の情報をセレクトして編成し、配信しているんだけど、信頼性があるらしくて、けっこうフォロワーが多いんだ。大手の同類のやつは、ジャンル別になっていたり、見やすいとは思うけど、あまりにもコンテンツが多すぎる。おまけにほとんど有料。でもピックアップは無料。で、ここに事前に伝えておいて、動画のアップロードを始めたら、できるだけリアルタイムで流してもらってわけ。どう？」

「そりゃあいいわね」

テン子が大きき目を見開いて膝をたたいた。鋼介もいいアイデアだと思った。インターネットテレビは時々見ているし、その影響力は大きいと実感している。

「それがSNSで拡散されて、じわじわと騒がれはじめる」

「現場の見当をつけて、車やバイクで駆けつけてくるやつもいる」

「大手マスコミにどうして報道しないんだと、クレームをつけるやつも出てくる」

「すると、マスコミも動かざるを得なくなる」

「といったストーリーね」

鋼介はにんまりとしてうなずいた。生徒たちのアイデアと自分の策をあわせると、この勝負にもしかしたら勝てるかもしれない。手応えが感じられてきた。あとは、計画通りに動けるかどうかだ。相手の組織の全容は依然つかめてはいない。想像を超えているかもしれないし、それほどでもないかもしれない。いずれにしろ、悔ることなく、全力を尽くして挑まなくてはならない。それもたつた一人で。いよいよ真意を告げるときがきたようだ。

「みんな、ありがとう。なんとかなりそうな気がしてきたよ。あとは、キミたちはあくまで傍観者でいてくれ」

「えっ？」

「どういうこと？」

「意味がわからない！」

予想どおり、三人のリアクションはすごかった。

「ここからは行動するのはぼく一人だ。キミたちはインターネットテレビを見ながら、応援してくるだけでいい」

「現場で手伝わせてよ。こんなチャンスは二度とないんだから」

テン子が食い下がる。

「いや、ダメだ。相手はとてつもない力をもっていて、非情だ。子どもだからといって容赦はしないだろう。場合によっては命の危険さえ伴う。そんなことにキミたちを巻き込むわけにはいか

ない」

「それなら、コースケ先生だって危ないわけじゃない？」

ヒデが心から心配そうに言った。

「前にも言ったと思うけど、これはほくだけの、まったく個人的な問題で、四十七年前に失ったものを取りもどすための挑戦なんだ。どんな危険な目に遭っても最後までやりとげようと心に決めた。戦いに敗れたとき、ダメージを受けるのはほくだけでなければならぬ。キミたちはもちろん、スクールにも絶対迷惑をかけない。そのことを、代表やオーナーに約束したんだ」

鋼介は強い口調できっぱりと言った。ふだん見せたことのない態度に、生徒たちは少しひるんだ。しばらくだれも言葉を出さない。午後五時を過ぎていたのだろうか、風がピタリとやみ、日中の暖気を含んで空気は澱んでいた。

沈黙を破ったのはヒデだった。

「わかったよ、コースケ先生。ボクらは陰で応援する。な、テン子、ダイチ。そうするしかないよ」

二人は一瞬驚いたような顔をしてヒデの顔を見たが、しばらくすると目を伏せてうなずいた。

「一つ聞いていい？ 現場を所轄するのは安中警察署だよな」

「えっ？ ああ、多分いまはね。前は松井田警察署だったけど」

鋼介はそう答えたが、ヒデがなぜそんなことを聞いてくるのか、不思議だった。ともかくも、

三人が聞き入れてくれたことに、ほっと胸をなで下ろした。

八月に入って、東京は連日三五度前後の猛暑が続いていた。東京だけではない、北関東の各地も同様で、額田が決行の日として最初に提案してきた八月六日は、前橋で最高気温三八度を記録した。山岳地帯は前橋に比べれば多少涼しかったかもしれないが、予定をキャンセルした理由は、立て続けに台風が発生したからだ。そのペースは驚異的ともいえるほどで、七月下旬から八月月上旬にかけての十日間に五個発生し、三個は日本本土に上陸した。その影響もあつてか、八月中旬を過ぎても天候が不安定で、なかなかスケジュールが決められなかったのだ。

額田とは何度か電話でやりとりしたが、明らかにいらだっていた。鋼介も、できればスクールの夏休み中に片付けたいと思っていたのだが、ずるずると予定が延びて、ようやく決行日が定まったのは、今シーズン最大の猛烈な台風が、千葉県房総半島に大きな被害を与えて通り抜けたあとの、九月中旬過ぎのことだった。

八月中、鋼介はヒマにしていたわけではない。生徒たちが提出した調査や研究のレポートが山積みになっており、ほかのスタッフとともに目を通し、評価を下さなければならなかったから、平日の昼間はほとんどスクールにいた。その間も、鋼介は監視され続けていた。炎天下にご苦勞なことだと思つたが、額田のグループにとって、自分は大魚なのだ。張り巡らせた網から逃すわけにはいかないのはわかっている。

テン子、ヒデ、ダイチの三人も、ときどきスクールに現れた。彼らも、以前から取り組んでい

る研究テーマがあり、まとめの作業はスクールでやるのが好都合だったこともあるが、鋼介のことが気になるのはしかたのないことだった。それがわかっているから、三人が顔を揃えているときにはできるだけ話に乗った。

あるとき、ヒデが真剣なまなざしでにじり寄ってきた。

「見つけたあとのことなんだけどさあ、記者会見をやるよね」

「やらざるを得ないだろうね」

「いまから準備しておいたほうがいいよ。とんでもない騒ぎになるから、きつと」

「わかった。忠告ありがとう」

そのことも覚悟している。世の中へのインパクトは想像以上かもしれない。すると、今度はテン子が発言した。

「隠されていたものを発見したときに関する法律だけど、現行のものは工事中なんか偶然見つけたものしか対応していないんだよね」

鋼介は思わず身を乗り出した。そのことについて以前から疑問に思っていたが、真剣に考えたことはない。テン子はノートを開いて、そこに書き込んだ法律の条文を読み上げた。確かに、民法二四一条と「遺失物法」以外に関連する法律はないし、発見されたものはまず持ち主を探すことを優先させており、持ち主が見つからない場合は発見者とその土地の所有者が物件を折半して所有することになっている。

「つまり、道で財布を拾ったときとまったく同じ扱いということ？ それじゃあ、今回のケースにはいくらなんでも当てはまらないよね」

ダイチがテン子の意見に同調する。ヒデも、もう少し踏み込んだ考えを述べた。

「偶然の機会と計画的な場合との違いだね。例としてヘンカもしれないけど、刑法でも計画的犯行と突発的犯行では扱いが全然違うよね。過失だったらもっと罪は軽い」

「そうだそうだ。工事中に偶然見つかったのは過失で、コースケ先生の場合は計画的犯行」
「犯行じゃないよ！」

合点がいきすぎて思わず口をすべらせたダイチをテン子がたしなめ、どっと笑いが起こった。
「でもどうして、きちんとした法律がないんだろう？」

「必要なかったんだよ、これまでは。見つかったのが偶然の機会だけだったから」

ヒデの疑問に鋼介は答えた。

「でもさあ、だれかが本気で探してて、掘り当てたものがまっただくなかったなんて、あり得ないと思わない？」

テン子の言葉は確かに的を射ていた。

「田丸老人から聞いた話だけど、かつては掘り当てたのがいたらしいんだ。らしいとしか言えないんだけどね」

「届けなかったんだ」

「ネコババね」

「ある本にこう書いてあったよ。日本の高度成長期の昭和三十年代から四十年代にかけて、東京都内だけでも十個くらい埋蔵金が見つかってるんだけど、実際には少なくとも百個は見つかるんだって」

(よくもまあ調べているもんだ)

鋼介は感心して三人の会話を聞き入った。そして最後にテン子がかこう締めた。

「アタシが法律の話をもちだしたのは、記者会見では必ず、見つけたものをどうするのかという質問が出るはずだから、個人の見解を述べる前に、法律の不備について主張しておいたほうが良いと思うからよ。それに気がついている人は少ないよ、きつと」

「所有権の問題をはっきりさせておいて、そのあとでコースケ先生が考えを述べてることか」

「そう、絶対そうすべきよ。というのは。アタシの考えでは、見つけたものの所有権は全部コースケ先生にあると思うわけ。甲州金がだれのものか、調べてもわかりっこないし、土地の所有者に半分が転がり込むっていう民法二四一条は、明治の終わりにできた化石のようなほとんど意味のない法律だし、そのところをきちんとしておく必要があると思うのね」

テン子は一気にまくし立てた。鋼介はいままで気がつかなかったが、この子はもしかしたら法律家を目指しているのかもしれない。素質的には申し分ないだろう。法廷での活躍が目に見えよう、頬がゆるむのがわかった。

「そうだね。全部の所有権が認められた上で、その権利を放棄すると発表したほうが。絶対かっこいいよな」

「あ、放棄するって、決まったわけじゃあ」

ヒデの言葉をダイチがさえぎった。

「え？　そうするんでしょう？　コースケ先生」

鋼介は両腕を広げて大きさに笑うしかなかった。笑いながら何度もうなずいた。正直なところ、ここまで考えてくれているとは思わなかった。この子たちのプランは、大筋で自分の考えに基づいているし、かなり細部まで気を配ってくれている。実に頼りになる。そのことが嬉しくてたまらなかった。

九月十八日、東京は明け方から曇っていて、前日に比べて急に涼しくなった。

額田は十人乗りのワゴン車を用意し、午前七時にスクールに迎えに来た。中には額田と運転手のほか、屈強そうな若い男たちが五人乗っていた。鋼介は運転席のすぐ後ろの二人がけの席に一人で座らされ、額田が斜め後ろの一人がけの席に座った。覚悟はしていたが、四方八方から監視されている気分だった。

出発の直前に額田が確かめてきた。

「別の情報提供者からは妙義山の麓と聞いていますが、それでいいですね」

鋼介は額田のほうに体をひねって、目を見据えた。

「彼は少し勘違いしていると思う。重要な手がかりは妙義山の麓にあるが、現場は榛名山なんだ」
「ほんとうですか？」

額田は疑いの目を向けた。

「ああ、だから、まずはその証拠を見てもらうために妙義山に向かう。菅原神社を目指してくれ」
自信たっぷりな鋼介の言葉に、額田もとりあえず納得した様子で、無表情の中年の運転手に指示を出した。

クルマは環八を通って練馬から関越自動車道に乗り、上里SAで一休みしたあと、藤岡JCT

から上信越自動車道に入った。ナビに従い、松井田妙義 IC を降りると、県道五一号を下仁田^{しもにた}方面へ向かう。ほんとうはそれとなく下見をするために、金鷄山の麓を走る県道一九六号を通りたかったのだが、まったく別ルートになる。ヘタに指示すると怪しまれてしまうので、自然の流れに任せることにした。最終目的地に鋼介が単独でたどり着けるかどうか、一発勝負に賭けるしかない。

午前十時ごろには目的地に着いた。菅原神社にあるもの。それは実に奇妙な代物だった。やはり幕末に御用金埋蔵の準備段階でつくられたものに違いない。いまとなつては無用のものだが、もしこれが役に立てば、あの日わざわざ調べに来た甲斐があつたというものだ。ただし、額田がうまくだまされてくれるかどうか、それも大きな賭けだった。

ワゴンが停車すると、鋼介は祈るような気持ちで、しかしその態度を表には出さず、朱塗りの鳥居をくぐり、急な石段をゆっくり踏みしめていった。

菅原神社はいうまでもなく学問の神様、菅原道真を祀る神社で、全国いたるところにあるが、ここ富岡^{とみおか}市菅原の社は九五〇（天歴四）年の創建。ウソかまことか、道真が二十五歳のときに彫つたという神像が安置されている。本殿にはさまざまな彫刻が施され、市の重要文化財に指定されている。そして、その境内の一角にそびえる天然記念物のオオヒノキの根元に、目立っているとも目立たないともいえない高さ一メートルほどの石柱が立っていた。その一面にくつきりと彫られた和歌は、道真の名前とともに、だれもがよく知っているものに一見そっくりだ。

東風吹かば 匂いおこせよ 梅の花 主なしとて はるな忘るな

「道真が太宰府に流されるときに詠んだ、有名な歌ですよね」

額田が当然知っているというような口ぶりで言った。

「ところが、これは道長が詠んだ和歌ではない。幕府御用金の埋蔵地を示唆する、いわば暗号なんだ」

「えっ、どうして？」

「第五句、最後の部分に注意してくれ。オリジナルは『拾遺和歌集』では『春を忘るな』、『大鏡』では『春な忘れそ』となっていて、ほかにも『春を忘れぞ』としたものもあるが、『はるな忘るな』というのはどこにも見当たらない」

「ということは」

額田も気がついたようで、目を見開いた。

「そう、『榛名山を忘れるな』という意味なんだ。有名な歌を利用したよくできた暗号で、全体を説明すると、まず『東風吹かば』は、春に決まって東の風が吹きだすように、『そのときがきたら』という意味。『匂いおこせよ』は普通に読めば、『匂いを届けておくれ』ということだろうが、次の『梅の花』は『埋め』にかけて埋蔵金の隠語なので、『眠っている財宝を目覚ませよ』と解釈できる。『主なしとて』は、『たとえ幕府が倒れたとしても』の意味だろう。つまり、『そのときがきたら、埋蔵した御用金を掘り出して、たとえ幕府が倒れていたとしても、再興資金として役立てよ。そ

のために榛名を忘れるな』ということなんだ」

鋼介は、石柱の別の面に「元治元年」と彫られた年号を指し示した。

「明治維新の四年前、私の調べでは、このころから埋蔵の準備が始まっている」

そしてしゃがみ込むと、同じ面の地面に近い部分に彫りつけられたこぶし大のマークのようなものに指先を当てた。

「天狗の形に見えますが」

間をおかず額田が声を発する。鋼介は首を縦に振った。

「なにを意味するのですか？」

「私もすぐにはわからなかった。そこで地図をよく見ると、カルデラ式の榛名山の外輪山の一部に天狗山というのがあったので、近くまで行ったが、あまりにもアクセスが悪い。絶対に重たいものを運んで隠すような場所ではなかった。ようやく謎が解けたのは、榛名神社に行つてからだ」

大きな神社には、遠くからの参拝客のための宿泊施設がある。榛名神社にも参道沿いにそういった宿坊が建ち並んでいる。江戸時代には九十以上あったというが、いまは十数軒が残るだけ。ただ、現存するのはいずれも歴史の古い大きな宿坊ばかりだ。その中に「天狗坊」というのを見て訪ねていくと、大当たりだった。先祖から代々言い伝えられている話があるという。幕末に大勢の武士たちが、重たそうな大量の荷物とともにどこからかやってきて、数日間投宿した。彼らがこの土地を離れたときには荷物はなく、宿で働く者たちは不思議に思っていたが、主人だけ

はその理由を知っていた。

宿坊の裏山には、それ以前から食糧などを貯蔵するために人工的に掘った横穴があった。武士団が去ったあと、横穴の入り口は土を盛ってふさいであり、主人は周囲に、

「ここには幕府にとって大事なものが隠してあるので、近づかないように」

と言いつつ聞かせ、以後だれも中を探ろうとした者はいなかった。

「そこをなぜあの男が見つけて中に入ったか、問いただす間もなかったからわからないし、私もこの石柱に導かれて天狗山から榛名神社の天狗坊へ行き、言い伝えを聞いて周辺を探っているうちに、そこへたどり着いたというわけだ。これも偶然としかいえない」

鋼介の説明は、天狗坊の言い伝えなど、半分は事実にもとづいているが、あとの半分は創作だった。これにうまく引っかけられてくれればいいのだが。

「お二人がそこを発見されたあと、今日までそのまま保存されている保証がありますか？」

案の定、額田がこの囃話の弱点を突いてきた。

「さあ、それは行ってみないとわからない。私自身、あれ以来四十七年近づいていないのだから。ただ、あれほど巨額のものが、あんたたちのような組織によって発見され、意図的に隠されたのなら話は別だが、ふつうの人間が偶然発見したら、大騒ぎになるはずだ。それと、天狗坊のいまの主人から聞いたんだが、秘密を知る当時の主人は、それから二、三年後、明治維新を待たずに心臓発作で急死しているそうだから、正確な情報はだれにも伝わっていない可能性が高い」

鋼介は冷静を装い、疑念をもたれないよう努めて言葉を選んだ。

「なるほど、わかりました。桜場さんのお話が正しいようです。ではみんな、榛名山に移動するぞ」
額田のひと声に、仲間たちはなんの疑いももたない様子でうなずいた。

ここまでではうまくいっている。敵はフェイクに引っかけられてくれた。第一ステージはクリアだ。天狗坊の裏山にそれらしい場所があることは、田丸老人から聞いていて、実際に行ってみたこともある。極左グループの二人と遭遇したころだったと思う。幸いなことに、現場は四十七年前とほとんど変わっていないかった。ただ、幅も高さも二メートルはある入り口が、ぱっくりと口を開けている横穴は、妙義のあの場所とは似ても似つかぬ形状だったから、あの男が中東のホテルから電話でどう伝えたかわからないが、イメージの大きな隔たりが気がかりではあった。

「ここですか？ こんな状態だと、だれかに先を越されたんじゃないか」

額田が落胆した様子で声を上げた。

「いやいや、穴の先にもうひとつの入り口があるんだよ」

その先が行き止まりであることを知りながら、鋼介はうそぶいた。

入り口からせいぜい五メートルほどで、土の壁が行く手をふさいでいた。その先に空洞が続いて、積み重ねられた木箱が存在することを、鋼介は自信たっぷりに説明した。どうやらこれもうまくいった。

「そんなに厚みはないはずだから、ツルハシを使って二、三人がかりで突き崩せば、奥に入れるようになるまで三十分はかからないと思う」

鋼介はそう言つて右手首を見た。安物のアナログ時計の針が十二時半を示している。

「ちよつとトイレを借りてくる」

と告げて、現場を離れようとした。すかさず額田が、

「おい、だれか、お供しろ」

と、顎をしゃくつた。まだ二十代と思われる、これもがたいの大きな男が、すつと鋼介に身を寄せた。これも想定内ではある。連中はひとときも自分から目を離すことはないだろう。しかし、裏をかく秘策は練っていた。

宿坊は昼間はそば屋もやっている。けつこう賑わっているようで、玄関に順番待ちの客が三人いた。鋼介は従業員にトイレを借りたいと声をかけて、靴を脱いだ。トイレは玄関を上がってまっすぐ続く廊下の奥を、右に曲がったところにある。廊下は薄暗く、トイレは玄関からは死角になっている。屋内は多少手入れはしてあるようだが、古い造りのままで、幸い以前と変わっていないかったので、秘策が成功する確率は高いと思えた。

「靴はここに置いていくから」

鋼介はわざと大きな声で若者に言った。まちがいなくそこへ戻ってくる意思があることを印象づけるためだ。彼がどんな教育を受けているか知らないが、少なくとも額田より純朴であつてほ

しい。期待通り、若者は黙ってうなずき、上がりかまちに腰を下ろした。

廊下の角を右折すると、鋼介はズボンのポケットに隠していた、折りたたみ式の布製の薄い履き物を取り出した。そして、トイレには入らず、そのまま廊下をまっすぐ進んで、裏庭に通じるガラスの引き戸をこじ開け、転がるように外へ出た。芝生の上で布靴を履くと、人目を避けながら建物の周りを半周して、朱色に塗られた長屋門から参道に飛び出した。まだ見張り役の若者は気づいていない。

鋼介は走った。標高は八〇〇メートル。すでに秋風が吹き始めている。頬に心地よかったが、息は切れる。天狗坊の長屋門から、駐車場のある土産物屋までのおよそ三〇〇メートルの下り坂を、ようやく走り抜いた。

駐車場の片隅に、古ぼけた一二五ccのバイクが置いてあるのが目に入った。鋼介の頬がゆるむ。土産物屋を覗くと、見慣れたひげ面の中年男が椅子に座っていた。

「ありがとう、ヤマちゃん。助かるよ」

鋼介が声をかけると、ひげ男はにっこり笑ってヘルメットと小さめのリュックを差し出した。顎をしゃくり視線を落としたその先にはスニーカーが置かれている。リュックの中には、予備のカメラやLEDライト、バッテリーが入っているはずだ。ひげ男は鋼介が帰国して間もないころから三十年近く懇意にしている川崎のバイクショップの店主で、山岡やまおかというのだが、店に出入りするバイク野郎はみんな「ヤマちゃん」と呼んでいた。お人好しで正直者。鋼介の頼みを聞いて、

移動用のバイクと撮影機材をここへ回してくれていたのだ。

「急ぐんでしよう。オレはここから路線バスで帰るからご心配なく。じゃあ、グッドラック」

山岡はこぶしを突き出した。鋼介もそれに応じ、コツンと軽い音を立てた。無駄な会話は不要だ。事情はあとで話す約束になっている。靴を履き替え、リュックを背負い、ヘルメットを装着すると、鋼介は振り返りもせず、すぐにスタートした。バイクは山岡がふだん乗っている二台のうちの一つで、古ぼけていても整備はちゃんと行き届いているはずだ。店主の腕のよさには定評がある。

県道三三三号を南下し、まっすぐ妙義山の麓を目指した。距離は約三五キロ、道が曲がりくねっているから、一時間以上はかかるだろう。いずれ、フェイクを見破った額田たちが、妙義山麓に狙いを定めてやってくるのはまちがいない。時間との勝負になる。できれば二時間、せめて一時間半の差をつけて行動できれば、なんとかなるはずだが――

安中市松井田で国道一八号を横切り、さらに上信越道をぐり抜けて、妙義町からかつての「妙義有料道路」、現在の県道一九六号、通称「上小坂四ツ家妙義線」に入った。ストリートビューでシミュレーションをしていたおかげで、鋼介は迷うことなく目星をつけた場所にたどり着いた。時刻は午後二時ちょうど。

以前は道路脇に幅二メートルから五メートルの平坦なスペースがあり、そこから切り立った斜面となっていたが、いまは落石を防ぐため、厚さ三〇センチ近い分厚いコンクリートの擁壁ようへきが、

道路に沿って設けられている。とところどころに隙間があり、バイクごと斜面の下まで入ることができたのは幸いだった。五〇メートルから一〇〇メートルの範囲内。そこに宝庫への入り口があるはずだ。

四十七年前、大発見はしたものの、それはまったく偶然の結果でしかなかったし、気持ちほとんど片品村の本命のほうにあったから、詳しく調べてみる気も起こらなかったのだが、実は過去にこの場所を探索したグループがあった。それがわかったのはつい数日前。テン子が市の図書館で見つけたある本に、次のような記述があったのだ。

探索が行われたのは、鋼介の調査のずっと前の昭和三十年ごろのこと。根拠となった資料については不明だが、幕末に現在の甘楽郡かんらくにあった小幡藩おぼたの藩主・松平忠恕ただゆきが、小栗忠順の命により金鉱を開掘すると称して、金鶏山の麓に洞窟を掘り、そこに甲州から運んできた御用金を隠したというのだ。しかも、洞窟の入り口は真四角に切られ、ぴったりの大きさのふたがされていたそうだから、鋼介が見たものと符合する。過去になにも成果が上がっていないのは、結局穴の入り口がわからなかったからだろう。あの日から今日まで、そのままであってほしい。鋼介は強く願った。

崖沿いに歩き始める前に、綱介はリュックから古ぼけた封筒を取り出した。中には一枚の写真が入っていた。四十七年前、彼自身が撮影した横穴の入り口だ。これが残っていたのは奇蹟というほかない。綱介は調査したあらゆる場所で写真を撮り、気になったことをメモにして残した。

写真はトータルで五百枚を超えていただろうか。メモは大学ノート八冊分になっていた。そのほとんどもをコロンビアに渡る前に処分した。ただ一点だけ、これが残ったわけは、決着をつけるために群馬へ向かう前に、手紙とともに田丸老人に送ったからだ。ほんとうは甲州金そのものの写真も同封したかったのだが、悔しいことにフィルム切れで撮れなかった。

片品へ向かう途中、高崎に立ち寄って直接渡してもよかったのだが、そのころ田丸が脑梗塞を患って、言葉も不自由なことがわかっていたので手紙にした。片品での成果に期待してほしいこと、そして、甲州金のある場所には、片品が終わりしだい案内することを約束し、元気づけようとしたのだった。しかし、そのどちらも果たせず、ついには田丸との接触の機会も失った。

それから長い年月が過ぎた。そしてついひと月ほど前のこと、今回のリベンジ計画を決意してまもなく、鋼介はおそろのおそろ田丸家に電話を入れた。番号は変わっていないが、出たのは老人の孫にあたる男性だった。彼の話によれば、田丸耕蔵氏は鋼介がコロンビアに渡って四年後の一九七六年に八十四歳で他界、夫人もまもなく亡くなり、息子さんまでもが六年前に八十六歳でこの世を去っていた。真相を伝えたかった人が一人もいなくなっていたのだ。時は無情に流れていく。

ただ、収獲というのは憚られるが、田丸家には鋼介が送った手紙が保存されていた。それを聞いた鋼介は、自分が送り主にまちがいを伝えることを伝えて、返送してもらったのだ。もとはカラー写真だったのが、色あせて全体がセピア色に近くなっていた。しかし幸いにも、正方形に近い横

穴の入り口は鮮明な映像として残っていた。そして、撮影したときも現像した直後も気がつかなかったのだが、入り口の右上三〇センチほどのところに、白っぽい点があった。大きさはこぶし大だろうか。周りが変色したために浮き出てきたのかもしれない。妙義山は火山活動によってできた山だから、マグマが固まってできた岩石に含まれる、石英か長石の塊の可能性があった。

(これが手がかりになりそうだ) という期待を抱いて、綱介はヤブを探り始めた。いくらなんでも、いまから一時間前には額田らがだまされたことに気がつき、こちらへ向かっていることだろう。彼らがこの場所を探り当てるのに要する時間を考えても、できればあと一時間以内に洞窟の中に入り、甲州金の山を撮影し、動画を配信したい。編集する余裕はないので、説明つきの映像を簡潔にまとめなければならぬ。頭の中で何度もシミュレーションしたが、果たして現場でうまくいくかどうか。

綱介は、拾った枯れ枝を手に、地面から一メートルと少しの高さの斜面の落ち葉や草を払いのけ、白い目印を求めた。開始して十分たつかたないころ、それは見つかった。やはり白っぽい岩石が出っ張ったものだった。次に、リュックから長さ三〇センチほどの小型のボールを取り出し、先端のへら状の部分で目印の左下の岩壁を強くひっかいた。カツンという軽い音がして、溝がすぐに見つかった。それに沿ってボールの先を水平に動かす。約一メートルの黒い筋が現れた。

(まちがいない！)

より確かなものにするため、綱介は黒い筋の両端から縦にかきおろした。両側に同じ太さの溝

が現れた。

「ようしー！」

遠い昔に発した記憶のある言葉の口にして、綱介は地上メートルの水平の溝にボールの先を突っ込むと、全体を梃子てこにして反対側を斜面に向かつてぐいっと押しつけた。

ガリツという音。そして、一メートル四方の石の板が浮いた。厚さは一〇センチ弱というところか。記憶のままだ。今度はボールの向きを変え、くの字に曲がったその先を石ぶたの上の方に引っかけると、力まかせに手前に引いた。

ふたがはがれた。スローモーション映像を見るように、手前にゆっくりと倒れてくる。綱介は左にさっと身をかわす。イメージ通りだ、ここまでは。願っていたとおり、この四十七年間、だれもここには入っていない。確信した。

横穴の奥から、ひんやりと湿った空気が流れ出してきた。暗闇がその先に続いている。気は急いたが、落ち着いてヘルメットをかぶり、念のためロウソクに火をつけて、ゆっくりと中に入った。閉所では酸欠が最も危険だ。一瞬で気を失い、死に至るケースがある。幸い炎の大きさは変わらぬ、前回と同じく中は十分に酸素があるようだった。

胸の高鳴りを必死に押さえ、綱介は撮影の準備を始めた。手持ちのスマホは、この春に機種変更したもので、写真やビデオの解像度など性能的には問題ない。ただ、解像度にこだわりすぎると転送速度が遅くなり、支障がある。そこで、720ピクセルのハイビジョン画質を選択し、16

対9の横位置で撮ることにした。右手にスマホ、左手にLEDが三十二個並んだライトを持つ。八本の単三電池内蔵だからずっしりと重い。そのスイッチを入れると、洞内がぱっと明るくなった。ふうっと大きく息をつき、ビデオモードにしたスマホのレコードボタンを押した。画面に洞内が映し出される。すぐに歩き出しながら、綱介は説明を開始した。

「ここは群馬県の妙義山の山中にある洞窟です。いまから四十七年前、私はこの奥でたいへんなものを見つけました。江戸時代に、甲斐国、現在の山梨県でつくられた金貨、甲州金です。一枚や二枚ではありません。金貨がびっしり入った箱が、いくつも積み重ねられていたのです。おそらく、江戸幕府が倒れそうになったときに、幕府の関係者が、新政府軍の手に渡るのを避けるために、ここに隠したのでしょう。それを示唆する記録も残っているようです。四十七年前に見つけたときは、事情があつてそれを外に持ち出すことができませんでした。私は現在、その洞窟内に入っています。そして、少しずつ、金貨に近づいています。いまだかつて、これほど大量の財宝が見つかり、世に発表されたことはありません。まさに歴史的瞬間が近づいています。ご覧ください、積み重ねられた木の箱を。あれが金貨が入っている箱です。以前に私が見たときと、まったく変わっていません。さあ、いよいよです。一個だけ箱のふたがあいているはずです。中をお見せしましょう」

綱介は箱の真上に右手で持ったスマホを振りかざし、次第に金貨のほうに近づけていった。連動させて、左手のライトもゆっくりと近づける。画面いっぱい金貨がまばゆい光を放っていた。

そのままの姿勢で話を続けた。

「私はいまからこれを外に運び出します。金貨が全部でどれくらいあるかはまだわかりませんが、もちろん、どれくらい価値があるのかも。でも、これを公にし、専門家にきちんと調べてもらって、みなさんにご報告することをお約束します。また、私がどのようにしてこれを見つけたか、そのいきさつについても詳しくお話するつもりです。ではいったん、ご報告を中断します」

そこまでの録画時間はおよそ二分三十秒。ネット配信用としては適当な長さだろう。言い忘れたことはないか、考えてみたが、いずれにしろもう一度撮り直す時間はない。すべては一発勝負だ。綱介はその場でスマホをチェックし、録画されていることを確認すると、急いで穴の外に出た。むっとする暖気に体が包まれた。時刻はまもなく午後三時。額田らはもうすぐそこまで来ていることだろう。一刻の猶予もない。

入ってきた擁壁の隙間を歩いてすり抜け、道路を横断して、一段下がったところにある一坪ほどの平坦地に出た。東の空が開けていて、電波を飛ばすには条件がいい。綱介は手早くスマホを操作し、撮ったばかりの動画に「特報・徳川の埋蔵金を発見！」とタイトルをつけ、投稿サイトへのアップロードを始めた。思ったより時間がかかる。祈るような気持ちで進行バーを見つめた。一〇パーセント、一五パーセント、拳に力が入る。ふと、顔を上げて耳をすませた。エンジン音が近づいてくる。あっという間に一台のクルマがコーナーを曲がって姿を現した。軽自動車だった。ほっとすると同時に、冷や汗が頬を伝った。

十五分ほどかかって、ようやくアップロードが終わった。計画では、現場での作業はここまで。あとはネット上に動画がアップされ、フォロワーの多いサイトで紹介され、拡散され、現場にも人が押しかけるようになり、マスコミが黙っていられなくなるのを待ただけだ。情報をキャッチした地元警察も出動してくるだろうが、裏から手が回っていても、現場が騒ぎになっていけば、もみ消すことは難しくなるだろう。

突然、電話の着信音が鳴った。ヒデからだ。受信ボタンをタップする。

「コースケ先生、すごいよ、バッチリだよ」

「見つけたものがなんだかわかるかい？」

「とにかく、とんでもない量のピツカピカの金貨が、箱に詰まっているのがよくわかるよ」

「そうか、よかった。じゃあ、事態が我々が望んでいる方向に向かうことを期待して、しばらくここで待つことにするよ」

そのときだった。遠くから聞こえてくるエンジン音に聞き覚えがあった。十中八九、額田たちのワゴンだ。しかしあわてることはない。すでに仕込みは終わっている。もう逃げ隠れしなくともいい。綱介は堂々と道路の真ん中に立ちほだかった。

ワゴンがゆっくり停車し、サイドのドアから額田がのっそりと降りてきた。無言で綱介に近づいてくる。綱介も無言で相手の目を見据えた。五人の若い者のうちいちばんがたいのいいやつが、肩をいかせてぐいと前へ出た。つかみかからんばかりだ。顔を見て、綱介がトイレに行くと

きに付き添った若者だと気がついた。唇に血をにじませている。きつとへまをしでかしたことで額田から叱責を受け、張り飛ばされたのだろう。あとの四人も一歩か二歩踏み出した。

「待て、おまえら、なにもするな」

額田が、いままで聞いたことのないドスのきいた声で制した。そのあと、綱介に向かってゆっくり口を開いた。

「なあ、櫻場さん、ゲームは終わりにしましようぜ。現場は私どもが引き継ぐ」

綱介に対する言葉つきも、ガラリと変わった。本性を現したようだ。綱介も負けじと胸を突き出し、相手に歩み寄った。

「あんたたちの思い通りにはならない」

「どうしてそう言える？」

またしばらく、無言のにらみ合いが続いた。静寂を破ったのは、あたりを走り回っていた若い男の声だった。

「洞窟が見つかりました！」

額田が綱介の顔を見つめたままにんまりして、指示を出す。

「ようし、中を調べてこい。すぐにだ」

穴の中には二人入っていったようだった。そして、一分もたたないうちに、中から興奮した声が聞こえてきた。

「すげえ、あんなの初めて見た。チョーすげえ」

こもったような声がだんだん大きくなってきて、二人が穴の外に姿を現してからも「すげえ、すげえ」を繰り返した。そのとき、綱介と額田のスマホが、ほとんど同時に音を立てた。顔を見合わせながら、着信ボタンに触れる。綱介のほうはまたヒデからだった。

「コースケ先生、変だよ。動画が例のサイトから削除されたんだよ。それだけでなく、おわびの字幕が出て」

「なんて？」

「先ほどアップした動画はフェイクでした。お騒がせしまして申し訳ありません、だって」

綱介は絶句した。

「もとの投稿サイトが残ってはいるけど、注目度は全然違うし、あんな字幕を出されたら、そっちが事実になっちゃう。どういうことか、さっぱりわかんないんだけど」

額田がニヤニヤしながらこちらを見ていた。

（もしかして、ヤツらの手が伸びたか）

どうやら推察したとおりだったようだ。

「動画の件かな？ 困ったよ、あんなことされて。ま、報告があつてから、すぐに手を打ったから大事には至らなかったが、余計な出費となった。あんなサイトをやっている連中は金さえ出せば言うことを聞く」

綱介は唇をかんだ。優位に立っていたはずが土俵際まで押し返された。そして、それに追い打ちをかけるようなことが起こった。遠くの山道をこちらに向かって近づいてくる赤色灯が目に入ったのだ。

（警察が来る。これもヤツの手配か）

警察車両は二台だった。先頭はミニパトで、目の前をゆっくり走りながら素通りして、一〇〇メートルほど先で停車した。通行止めにして現場を隔離するつもりだろうか。もう一台は普通は事故処理用に使うワゴンタイプのパトカーだった。こちらは額田たちのクルマの後ろにピツタリつけて停まり、中から夏の制服を着た貫禄のある警察官が降りてきて、綱介たちのほうに歩み寄った。綱介は、自分たちの計画を阻止するために、額田かもしくは伴自身が地元警察にまで手を回していたと信じて疑わなかったが、一瞬、額田の顔に不審そうな表情が浮かんだのを感じた、

（なんだかおかしいぞ）

綱介の疑問はすぐに解けた。貫禄のある警察官が、綱介に向かってこう言ったのだ。

「櫻場先生ですね。安中警察署長の松井です。松井秀人の父です。息子がたいへんお世話になっております」

綱介は声も出せず、大きく目を見開いた。

「ここからは警察にお任せください。先生のご計画通り、法に従い適切に処理します」

「ちよっと待ってください。署長、どういうことだ？」

横から額田が口出した、かなり動揺している。

「どうもこうもありません。警察は警察の仕事をするまでです」

松井署長と額田がにらみ合った。しばらくして、額田が胸のポケットからスマホを取り出した。伴、すなわち最高司令官の指示を仰ごうというのだろうか。そのとき、離れたところでスマホをいじっていた若い者の一人が大声を上げた。

「額田さん、たいへんです。御前が倒れられたそうです。意識がないそうです」

「なんだと？」

額田グループが全員足をばたつかせている。完全に形勢が逆転した。とどめは署長の太い声だった。

「さあ、あなた方には引き揚げてもらおう。いまなら公務執行妨害罪には問わない」

額田グループが悪態をつきながら洪々引き揚げたあと、現場のほうは安中署員数名が警備に立った。甲州金には手をつけず、県の教育委員会と群馬大学に連絡をとり、文化財保護の専門家の手で調査を行う手はずがととのえられた。専門家による現場での調査は翌日一日だけ。その後、甲州金は警察の手で搬出されて安中署に保管、種類や数量などが詳しく調べられることになった。松井署長は宿泊もできる大型テントの設営、発電機と洞窟内も含めた照明設備の設置などをテキパキと指示し、鋼介にはバイクであとを追うように伝えて車両に乗り込んだ。

三十分後、鋼介は安中警察署の署長室に入った。驚いたことに、そこにはヒデこと松井秀人もいた。数日前からこちらに来ていて、父親にすべてを話し、理解を求めたというのだ。鋼介は隣り合つてソファに座る父と子の顔をかわるがわる眺めた。やおら、父の松井署長が口を開いた。「先生、ご承知かと思いますが、私たち親子の関係は、ずっとうまくいっていませんでした。いや、悪いのは私のほうなんです。妻と息子を東京に置いてこちらに赴任してからは、家族の、とくに息子のことが気がかりでなりません。遊星学館に入れていただいていたからは、その評判が耳に入っていましたから、だいぶ気が楽にはなっていました。息子の成長をそばで見守ることができずにいましたから、実際どうなっただろうと、やはり不安ではありました」

署長はゆっくりした口調で、ヒデが突然現れてからのことを語った。ヒデは隣で照れくさそうにしていたが、鋼介の表情は次第にやわらかくなつていった。

「思い起こせば、親子関係が悪くなるきつかけとなつたのは、私のつまらない意地でした。大人ぶつた考えを押しつけてしまつたんです。だれに似たのか、もともとこの子が素直な性格だといふのは感じていました、少し羨ましかつたんですよね。でも、それが人として大事なことだというのを、改めて感じさせられました。社会正義について論じる息子を誇りにさえ感じたほどです。これも、桜場先生のおかげです」

「秀人君は、私にとつても誇らしい生徒です。また、今日は素晴らしい親子の関係に接することができて、教育に携わる者として、これほど嬉しいことはありません。そして今回のことでは、

ヒデ君とお父さんに助けていただきました。心から感謝しています」

鋼介は深々と頭を下げた。

「しかし、だいじょうぶなんですか？ 私が敵対する相手は、警察組織の上のほうにも強い影響力をもっているようです。署長の御身になにか起こらないかと心配しているのですが」

鋼介の問いに署長はきっぱりと答えた。

「覚悟はできています。息子との関係を修復できたんですから、もうなにも怖いものはありませんよ。それから、私の身によくないことが起きるかどうかは、いまのところ五分五分だと思っています。実は一つだけ、いい材料があるんです」

松井署長の口から出たのは、今回の一件に関わりをもつ、海外に潜伏する極左グループの生き残りのことだった。息子のヒデを通して、ヤツが確かに生存していて、額田志朗のグループの情報になったことを知り、大いに驚いたという。もし額田から詳しいことを聞き出すことができれば、それを公安に流すことによって松井の評価は確実に上がる。直接事情聴取ができなくても、額田とヤツが接触したという事実だけでも価値ある情報なのだ。なぜなら、海外逃亡中のテロリストの逮捕は、公安にとってはAランクの懸案事項だからだ。

それだけではない。もう一つ、松井がこの件に深入りせざるを得ない事情があった。恩師の無念を晴らすことである。警察庁に入庁してまもないころ、警察官僚としての心構えをたたき込んでくれたのは、南軽井沢の事件の際に現場で指揮をとった人物だった。部下を狙撃し死に至らし

めた因縁深い主犯の一人は、一九七五年に起こったクアランプール事件の際に、超法規的措置により釈放され海外に逃亡した。その無念さが、固いしこりとなっていつまでも恩師の心に留まっていたのを松井は知っていた。「あいつを捕まえるまでは山荘立てこもり事件は終わらない」という怨念のこもった言葉を何度聞かされたことか。その恩師はついに願いを果たすことができず、去年八十七歳で世を去った。ずっと閉ざされたままだった事件解決の糸口がつかめるかもしれない。思いがけなく転がり込んできた機会を、松井としては逃がすわけにはいかなかった。

ちょうど話の区切りがついたとき、署長室のドアがノックされ、制服姿の女性署員が入室してきた。眉間にしわを寄せていて、署長に耳打ちした。署長は話を聞き終えると、「わかった、ご苦労さん」と声をかけて彼女を退出させ、鋼介に向き直った。

「心配していた事態になったようです。地元のマスコミが嗅ぎつけ、騒ぎ始めました」

「そうですか。予測していたことですが、早いですね」

鋼介は苦笑いした。余裕はある。しかし署長は真剣なまなざしで自分の考えを述べた。

「マスコミへの対応は急いだほうがいいでしょう。裏から手を回されて事実が隠蔽されてしまう前に、世の中に広く知られたほうが得策です。本日中に会見を開きましょう。いえ、最初は私が矢面に立ちます。ことのあらましかを説明して、教育委員会の調査結果を待って、一週間後に二度目の会見を開く。そのときは桜場先生、当事者としてお出まし願うというところでいかがでしょうか」

鋼介は承知した。すぐに前橋の県警本部の記者クラブに連絡がとられ、午後六時から安中警察署の会議室で記者会見を開くことが告知された。それまでの一時間半ほどの間に、鋼介と松井署長との綿密な打ち合わせが行われた。

「桜場先生は会見場の後ろのほうで聞いていてください。私が間違ったことを口走ったら合図を送ってください」

隣に座るヒデが、うなずきながら鋼介の顔を見た。鋼介も笑顔で応えた。

時間どおりに、会見が始まった。集まったのは地元紙と三大紙の群馬支局の記者、NHKの支局のカメラマンと記者に、あと四、五人、ミニコミ紙と地元のネットメディアの関係者だった。署長はあらかじめ、一週間後に二回目の会見を開くことを伝え、本日午後二時ごろに妙義山麓の洞窟で、幕末に隠された徳川幕府の御用金の一部と思われるものが発見されたこと、現場は安中警察署の管理下で保全され、明日中に専門家の手で調べられたあと、署内で詳細な調査を行う予定であることだけが発表された。発見者の氏名などは伏せられ、おそらく記者たちが最も知りたいこと、なにがどれだけ見つかり、どれくらいの値打ちがあるのかなどは、後日発見者が自ら語るのと付け加えられた。もちろん、会場内に当事者がいることはだれも知らなかったはずだが、後方の席に座っていた、記者とはちよつとタイプの違う若い女が、ときどき鋼介のほうに視線を送り、様子をうかがっていた。そのことに、鋼介はとうに気がついていった。

ざわめきの中で会見が終わると、鋼介はさっと席を立ち、会議室のある二階から急ぎ足で階段

を降りて入り口に立ちふさがった。思った通り、不審な人物は一番手で降りてきて、鋼介に気づきハツとした顔を見せた。

「帰ったら額田さんに伝えてくれ。海外にいる情報提供者を日本に連れ帰ってくれたら、見つかったものの半分を渡してもいいと」

もちろん、九十九パーセントあり得ないことを前提に投げかけたのだが、女は目を伏せたままスタスタと前を通り過ぎた。返す言葉をもちあわせていないのは、敵グループの指揮系統に狂いが生じていることの証でもある。伴禮治郎がああ倒れたとあつては、しかたのないことだ。

その夜、鋼介は署長が手配してくれた警察署の真向かいにあるビジネス旅館で疲れた体を休め、翌朝いったん東京に帰ることにした。借りたバイクを返さなければならぬ。父が住む官舎に泊まったヒデも、新幹線で帰京した。別れ際、ヒデは言った。

「コースケ先生、帰ったらすぐに記者会見の資料づくりを始めるからね」

鋼介は笑ってうなずいた。これまでもろもろ手伝ってもらったことの最後の仕上げとして、その作業は三人にふさわしく思えた。自分ひとりだと、どうしても思い入れが強くなってしまいうだ。事実を余すことなく伝えるためには、客観的な視点が入ったほうがいい。

鋼介が帰京してから五日後に、調査委員会の鑑定の結果が知らされた。想像をはるかに超える量と額だった。甲州金は武田時代から江戸時代初期につくられた古甲州金と、元禄以降、幕末近

くまでつくられた新甲州金に二分される。発見されたものうち貨幣はすべて新甲州金だった。一分、二朱、一朱、朱中の四種類があり、規格は江戸の金座と同一で、金一分は一匁（三・七五グラム）とされていた。四進法で、一朱は一分の四分の一。朱中は甲州金独自のもので一朱の半分。丸いものと四角いものがあり、丸いのは麦飯を炊くときに入れる押し麦くらいの小さな金貨だ。それでも一枚一枚に甲州の金座を仕切った松木家の極印が打たれていた。

発見された箱の数は全部で二十五個。一個が二〇キロ近い重さがあった。内訳は、一分金が五千枚入った箱が四個、二朱金一万枚入りが四個、一朱金二万枚入りが五個、朱中三万枚入りが四個、さらに、金貨にする前の棒状の竿金さおがねが入った箱が八個あった。竿金は等しく一本百匁（三七五グラム）で、一箱に五十本ずつきれいに詰められていて、すべてに極印があった。

（たいへんな数だ。短い間にどうやって数えたのだろう）

鋼介は驚嘆した。金貨の枚数はすべて万単位で、小さな朱中にいたっては合計十二万枚もある。しかしすぐに納得できた。規格に基づいてつくられているから、全体の重さを量って一個の重さで割り算すればよい。それに、計画的に箱に詰められたものだと思うので、きりのいい数量にされているはずだ。多少の誤差はあるかもしれないが、調査委員会の報告は信用できる。そして、全体の量を計算し、数字を眺めているうちに、重要なことに気がついた。

金の総量は四百五十キロほどあった。武田時代から江戸時代初期までの規格では、一匁が四匁（一五グラム）だから三万匁に相当する。ところが、一匁小判は幕末が近づくとつれてだんだん

小さくなり、金の品位も低くなっていった。財政立て直しを目的とした改鑄である。最後の万延まんえん小判は別名「雛ひな小判」といわれるほど小さなもので、重量は約三・三グラム、金品位は五七パーセント程度。使われている金の量は一・九グラムほどしかなかった。江戸時代初期の慶長小判には規格どおり四匁の金が含まれているのに、実にその八分の一に落ちている。それでも当時の通貨としては同じ一両で通用したのだ。

(なるほど、万延小判を基準にすれば、金の総量は二十四万両相当分というわけか)

幕末まで甲府勤番にあった二十四万両の御用金が、密かに上州方面に運ばれたという伝承にピツタリ一致する。ただ、調査委員会からは、全部でいっただれくらい値打ちがあるのか、その数字は上がってこなかった。無理もない。ヘタに数字を出すと恥をかく。しかし、会見に臨む記者たちは当然そこを知りたがるはず。そこで鋼介は、ある程度満足してもらえる答えを用意することにした。

まず、四五〇キロの金を地金じがねと考えたとき、金貨も竿金も純度を九〇パーセントと仮定すると、約二十二億円。問題は文化財的価値だが、八年前に四匁（一五グラム）の古甲州金が一枚五百万円で取引されたことがある。地金との価格差は約六十倍。これが一つの基準となるが、市場での文化財的価値は、同じものが大量に出回ると大幅に下落する。市場に出なくても、発見情報が相場に影響を与える。そういうデータを示して判断してもらえないが、大雑把に言えば地金の価格の二十倍から三十倍というところに落ち着くだろうか。

翌日の午後、テン子、ヒデ、ダイチの三人が、それぞれの得意なところを生かして作ってくれた文書をもとに、鋼介は自分のデスクで会見資料の仕上げに取りかかった。会見はもう明日に迫っている。発見されたもののデータ、そして自分のプロフィールと、長い空白の時期はあるが、四十七年前からの経緯を加えると、文書はA4サイズの用紙で十二枚ほどになった。推敲を重ね、極力ムダな部分を削り、最終的に十枚ちょうどにまとめあげた。

（完璧だ。だれも高校生が作ったものとは思わないだろう）

会見で想定される質問に対する答えを、可能な限り資料に含めることを目指していたが、うまくできていない。さらに、物件の法的扱いについて論じた部分は、記者たちの共感を得ることは間違いない。法律に不備があることを、テン子が論理的にわかりやすく説明してくれた。質疑応答の時間は十分にとるつもりだが、質問はできるだけ少ないほうがいい。不祥事を起こした政治家や経営者、芸能人などの会見が、質問が多くて収拾がつかなくなるのは、記者とその背後にいる視聴者や読者が納得できる答えが用意されていないからだ。

（ともかく、やれるだけのことはやった。これ以上は望めない）

鋼介はこれまで三十年にわたって、多くの少年少女に接してきた。いろいろな子がいた。世間から見れば大半は問題児。だが、実は指導する立場の自分のほうが、生徒たちから刺激を受け、多くのことを教えられたと感じている。この仕事があったから、自分が成長できたのは疑う余地がない。二十代の初めからしばらくは、抜け殻のような日々が続いた。自暴自棄にならずによかつ

たと心から思う。救ってくれたのはほかでもない、スクールのオーナー、須藤誠志郎氏だ。

そしていま、テン子、ヒデ、ダイチという、すばらしい個性と能力をもちあわせた三人の生徒との出会いが、自分の人生に大きなインパクトを与えてくれた。はるか昔に失ったはずのものを取り戻すきっかけをつくってくれたのだ。一人では勇気を奮い立たせることができなかつたかもしれない。

午後六時を過ぎ、生徒もほかのスタッフも帰ったあと、鋼介のデスクの上に置いた会見資料の向こうに、三人が立っていた。ときどき覗きに来て、完成するのを待っていたのだ。

「ご苦労さま。そしてありがとう。キミたちのおかげでここまでこぎ着けたよ」

「コースケ先生、まだ勝負は終わってないよ。詰めが大事だよ」

テン子がいつもの調子でダメ出しする。

「わかった。気を抜かないよ」

鋼介はまじめな顔で返した。そして、いつ言おうかと、その機会をうかがっていたことを切り出した。

「きみたちは、天才だと思う。前に話したけど『三才』って言葉を覚えているかい？」

「あ、えっと、三人の天才だっけ」

すぐにヒデが反応したが、横からテン子が大きな声を出した。

「違うよ！ アタシ、前から気づいてたよ。天地人でしょ、三人の名前に含まれる。おまけに松

竹梅の三友も揃って、あまりのことに、なんだか口に出すのが怖くて」

「あつ、そうか。いま気がついた！」

ダイチが声を張り上げた。ヒデも目を丸くした。

「すげえ、オレたちってすげえんだ！」

ちようどそこへ、須藤陽香代表が入ってきた。

「えっ、なんの騒ぎ？」

「三才と三友ですよ、代表」

「ええっ？　意味がわからない。だれか説明して」

首をひねる一人と、声をあげて笑う四人。スタッフルームがこんなに賑やかになったのは、おそらく初めてのことだ。

九月二十五日、群馬県内は最低気温が二〇度を下回っていた。東京はそれよりやや暖かったが、季節の変わり目のよく晴れた日の朝、ヘルメットのすきまから顔に当たるひんやりした風に心地よさを感じながら、鋼介は昔と同じ道をバイクでひた走った。四十七年前、関越自動車道はまだ練馬から川越までしか開通していなかったから、この道を利用するしかなかったが、久し振りのツーリングのルートとして、彼は国道一七号を選択した。

安中警察署での記者会見は午後四時から行うことにしていた。午後七時からのテレビのニュー

スに間に合うし、夕方のワイドショウで生中継できることも考慮していた。その前に寄りたいたところがあったので、鋼介は早めに川崎の自宅を出発した。

高崎市の上丸家に到着したのは午前十時ごろ。かつての判子屋兼文具店はコンビニに変わり、奥にある住居で、田丸耕蔵氏の孫夫婦と初めて顔を合わせた。仏壇の前に案内してもらい、持参した菓子折を一つ脇に供え、鋼介は手を合わせ瞑目した。口に出して報告したいことは山ほどあったが、相手はいまの自分の姿を見てすべてを知り、喜んでくれていることだろう。

お茶を一杯ごちそうになっただけで、十五分ほどで田丸家にはいとまを告げた。北上して沼田市から国道一二〇号に入る。市街地を抜けると、見覚えのある地形が眼前に広がってきた。右側は片品川の深い河岸段丘で、その向こうに赤城山を望む。しかし、沿道に建ち並ぶとんかつ屋や焼き肉レストランなどの飲食店、大型の家電量販店、ホームセンター、そして、赤い果実をたわわに実らせたリングの木が道路際まで迫る風景は、時の流れによって生み出されたものだった。

さらに、事前に調べて頭に入っていたものの、旧白沢村から旧利根村へ、二本のトンネルで一気突き抜けるバイパスは、まさにタイムトンネルそのものだった。二十代の初めは、椎坂峠しいさか越えの山道で、バイクをローリングさせながら三十カ所の急カーブをきって、ライダー気分を満喫していたのだが、もうそれを楽しむ歳ではないからありがたかった。

片品村に入る手前の平川から花咲へ向かうルートを選ぶ。こちらが目的地へ行くには近道だ。このあたりも沿道の風景は変わっているが、道そのものは昔のまま。途中で村道へ入り、峠へ向

かう分岐ではさすがに迷った。細い山道がアスファルトできれいに舗装されていたからだ。舗装道路は峠までずつと続いていた。そしてその場所は、昔と変わらない佇まいを残していた。

宇条田峠。グーグルマップにその地名はないが、国土地理院の地図にはちゃんとのっている。峠といっても、そこに表示があるわけでもなく、道は狭いし、傾斜も緩やかだから、車で走り抜けたらそこが峠だったことに気がつく人はほとんどいないだろう。バイクでも、微妙なアクセルの感覚で、上り坂から下り坂への境がやっとわかる程度だ。

鋼介はエンジンを停止させると、落ち葉を踏みしめて路傍の奥に歩み寄った。四十七年前と同じ場所に、同じ向きで「馬頭観音」と文字だけを彫った石碑が建っていた。もとは観世音菩薩の化身で悪を懲らしめる神だが、江戸時代、使役用の馬の守り神として信仰された。道中斃死した馬の供養として道ばたに建てられたものが多い。これも、そういったものの一つのはずだが、ほかとちがうのは、背面に大きく「大黒天」の文字が刻まれている点だ。二十二歳のとき、鋼介はそれに気づいた。「大黒天」が徳川の御用金埋蔵のキーワードであることを、これを見て確信し、同時にそれが埋蔵の基点だと察知した。

埋蔵地を示す方角と距離は、すでにわかっていた。距離は四通りが考えられたが、現場で理にかなう一つを選択すればよかった。御用金は木箱に入れられて、八頭の牛の背中に二個ずつ振り分けに積んで運ばれたという。兵法「八門遁甲」では文書は残さない。言い伝えと地上の物証が手がかりとなった。牛を引いて街道を堂々と歩けば、後々まで目撃談が残る。普通は金箱のよう

なものには菰などをかけて隠すものだが、むき出しにしてそれとわかるようにした。御用金の量と運搬の方法を、最初から手がかりにすることを想定していたとは思えないが、知恵者は機転を利かせてそれを使った。すなわち、方角は「丑（北北東）」、距離は「八」。距離の単位は歩数と尺の二通りが考えられた。鋼介はさらに金箱十六個の「十六」という数字の可能性も捨ててはいなかった。

結果的に、馬頭観音から北北東に八歩行ったところが埋蔵地点だった。計画段階ではおそらく上毛三山を基点とする結界を張り、その中に納める壮大なスケールの埋蔵を考えていたのだろうが、思うように金を集めることもできず、幾度も計画の変更を余儀なくされ、最後はこのように大幅なスケールダウンをした。考えてみれば、徳川幕府の力そのものが、幕末にはスケールダウンしていたのだ。それでも、現場で動いた知恵者たちは必死だったにちがいない。そして、宝蔵を二重構造にするという「もうひと工夫」を忘れなかった。そうすることによって、安全度は数倍に高まった。

田丸老人は「埋蔵金探しは昔の人との知恵比べ」と言っていた。その勝負に勝たなければ、目的のものを見つけることはできない。はたして自分は勝負に勝ったのだろうか。ここにたどり着いたのは自分が初めてだったかもしれない。しかし、邪魔が入らなかつたと仮定したとき、この二重構造を見破ることができたかどうか。

(完勝とはいえないが、いずれにしろ、終わった)

鋼介は馬頭観音に両手をかけて腰を落とし、力一杯回転させた。台座と擦れ合い、ゴリゴリッという音がして、思ったより簡単に九〇度回転した。全体がわずかに沈み込み、収まるべきところ収まったような感触もあった。この石碑がいつ建てられたのかはわからないが、「馬頭観音」の文字が彫られた面は、もともと道に正対していたはずだ。その裏面に「大黒天」の文字を彫り、向きを変えたのは幕末の知恵者たち。しかるべき者に気づいてもらうための細工だろう。いま鋼介の手で石碑は百五十一年ぶりに原状に復した。

心なしか、あたりの空気が変化があった。ざわざわと木の枝が音を立て。色づいた葉がハラハラと鋼介の肩にも降りかかった。落ち葉のカーペットの上に腰を下ろし、じっと目をつぶる。種類はわからないが、野鳥のさえずりが聞こえている。遊星学館のダイニングにいるような気がしてきて、自然と頬がゆるんだ。

自分には居場所がある。そしてまだまだやるべきことがある。その仕事はたぶん死ぬまで続く。世の中への貢献度は微々たるものかもしれないが、やらないよりはましだ。気力は衰えていない。なんて幸せなんだろう。腹の底から満足感がこみ上げてきて、体全体に新たなエネルギーがみなぎった。

そのいっぽうで、これから自分の身に起こることへの不安も多少はあった。記者会見が始まるのは数時間後。それが終わったあとのことを想像してみる。マスコミは大騒ぎして、当然、鋼介自身も取材のターゲットになるだろう。それなりの対応はするつもりだが、振り回されたくはな

い。騒ぎが一過性のものであってほしい。二十代の自分の身に起こったのなら、それをなんらかのステップにできたかもしれないが、鋼介の場合はその後の人生で得たもののほうがずっと大きい。いまさら自身の生き様まで左右されるほどの出来事ではない。たまたま巡ってきた機会をとらえて、四十七年前の借りを返すだけだ。マスコミがどれだけ真実を世に示してくれるか、わからないし、額田グループが反撃に出ることも考えられる。中東のどこかの国に潜むあいつのことも、法律問題も気がかりではあるが、静観するだけ。できれば首を突っ込みたくない。スクールや生徒たちのことを思えば思うほど、そういったことが自分から遠いもののような気がした。

鋼介は立ち上がると、服についた落ち葉を払うでもなく、入念にヘルメットとグラブを装着し、バイクにまたがった。キーを回してスタートボタンを押す。キュルキュルというセル音が続いて、エンジンがスムーズに始動した。ギアを入れ、アクセルをふかしながら、来た道をゆっくりと走り始めた。

(了)